漱石の演説

Junko Higasa

夏目漱石は明治 38（1905）年『吾輩は猫である』で注目されたので一度講演を行ったが、明治 40（1907）年朝日新聞社入社後は社員として講演することを余儀なくされた。「余儀なくされた」というのは義務を伴うからであって、漱石自身は講演が苦手であった。そのためか講演の度に前置きが長い。まず漱石は「講演」でなく時に「演説」という言葉を使い、話の冒頭でいかに演説が苦手であるかを訴え、再三断っても要望されるので仕方なく引き受けていると述べている。言い訳がましくも聞こえるが、これは漱石が真面目で几帳面な性格であったことに由来するだろう。また漱石自身のプライドも関係している。「講義なら常々行っているので自信がある」と述べているが、それは一定レヴェルの頭脳と同じ目的を持つ学生が相手なので、話のレヴェルの目標値は明確である。聴衆は得るべき「知識」に集中する。ところが講演会の場合は一般大衆が相手である。それぞれの生活環境や学力、人間性が様々である。したがって話の受け取り方も様々であると言える。また文筆ならば読者は読み物に集中する。しかし講演の場合、話の内容ばかりでなく講演者の風貌や身振りも含まれる「印象」が結果に直結する。お互いの姿を知らずに紙という媒体に向き合うのと、媒体なしに直面するのではおのずと違う。漱石の懸念は、専門的な表現に偏りがちな自分の話を大衆がどこまで理解してくれるか、またどのように表現すれば人間共通の問題において賛同を得られるかにあったろう。自分の心の器量は言葉の技量によってどこまで及ぶだろうか？また同時に、自らの孤独から湧きいずるユーモアを抱えたサーヴィス精神旺盛な漱石は、人々に自分の話をできるだけ楽しんでもらいたいと思ったことであろう。

そして漱石の「真面目」という精神性は身なりにも現れる。元来オシャレであった漱石は TPO をわきまえた人物であった。オシャレとは自分を美しく見せたいという自意識と捉えられがちであるが、効果はそれだけでなない。身なりをきちんとすることは自分の精神の引き締めでもあり相手に対する礼儀でもある。いわば物事に臨む精神のけじめである。フロックコートを着て高襟を付けて講演に臨むことは、漱石にとって相手に対する礼儀であったろうと思う。それは相手の人間性の尊重にもつながる。

さて、その演説の導入部分は「枕」である。漱石はここで何故こんなに長く自分の状態を説明する必要があるのだろう？それは「私はきょうこの場でこういう話をするけれども、今演壇に立つ私は講演会のために外面的にふさわしく整えてはいるが特別偉いわけではない。中身は聴いているあなた方と変わりない『人間』である」と言いたかったのではないだろうか？したがって同じ人間としてする話を、同じ人間として受け止めてもらいたい。漱石はそこにある人間同士の真実の交流を求めたのではないだろうか？彼はよく「私がこうやっていい加減なことをしゃべった次には別の人のためになる講話があるから」ということを言っているが、そこには「演説」が苦手であるという自分自身の中の真実と、自分の話は理解してもらえるというある程度の自負と、もっとうまく演説出来たらという理想が含まれているように思う。漱石は朝日新聞社入社 3 か月前に『野分』の中で高柳周作君を魅了する白井道也先生の演説場面を書いた。それは世間の事実であると同時に彼の夢であったかもしれない。(2012.8.18)